

# 心の扉を

## 開いたら

患者会・福祉団体便り

「障がいとは個性」と言う人がいます。個人の特性や特徴という言葉の意味合いからすれば決して否定はできません。しかしこの言葉は肯定的な意味で使われることが多い気がしており、当事者や家族の中には、当事者が望むべきもない障がいを「個性」と呼ばれることに対してつらさを感じている人が多くいます。

同じように「障がいを持つ人」という表現についても、自分の意思で「障がいを持つ人」はいないため、「障がいのある人」という表現が好ましく思います。

身体・精神・知的・発達など、障がい種や特性はさまざまです。私たちがさりげなく使用している言葉や表現が、受け取る相手を傷つけることも多くあり、結果として差別につながる場合もあります。

視覚障がいのある方に聞いた話ですが、交差点を渡ろうとした時に「お手伝いしましょう」と白杖を持っていた方の手を引いてもらったことがあるそうです。親切な思いと優しさを感じたために、交差点を渡った後で厚くお礼を

## 障がいは個性？

伝えたそうですが、本心では恐怖におびえていたそうです。

理由を聞くと「視覚障がいのある私にとって白杖は『目』の役目をしており、その手を相手に持たれたことで目が機能しなくなり、怖い思いをした。私たちを導いてくれる場合は、白杖を持っていない逆の手を肩に乗せて歩く方法を取ってもらいたかった」とのことでした。結果としてこの場合は相手の善意が視覚障がいのある方につらい思いをさせてしまったようです。

日常的に交流の少ない障がい特性への認識は薄く、善意と思っている支援が結果的に相手を困惑させるような方法を取ってしまった場合もあるかもしれません。

「思いやりとおせっかい」「しつこく虐待」。この二つの言葉における境界線への認識は、与え手と受け手によって異なることが多く、双方がお互いの立場や状況をよく理解した上で、なおかつ誤解を生まないように確認し合っていかなければ、お互いが望まないつらい結果を招くことが生じるような気がします。

そしてそれは障がいの有無にかかわらず、家族や社会の中でお互いが共生する上で必要不可欠な大切な条件なのだと思います。